

学び続ける学校

別海町立別海中央中学校 校長室便り

発行 校長 青坂信司

第11号平成27年12月16日(水)

※「授業を核に授業の質を高める」

授業で生徒が変わっていく瞬間

- ◆授業に関して、何が教師の悩みとなるのか。その最大のものが教室にはさまざまな生徒がいるということである。例えば、授業冒頭に5分間のミニテストを実施することがある。前回の復習だ。ミニテストをやる前、「あれほど一生懸命教えたのだから」教師は全員ができるものだと思っている。ところがミニテストを実施し、丸付けをその場でさせると、全問できる生徒はもちろんいるが、ほとんどできていない生徒もいる。できていない生徒を見たとき、教師はどうしたらいいのか、瞬時にその場で判断することが迫られる。限られた50分という時間の中で、しかもその時間にやらねばならないことがある。今一度時間をとって、前回の復習をするべきなのか。それともできなかった生徒には、後で補習をするのか、宿題として与えるのか。教師は、授業の瞬間、瞬間に判断しながら、さまざまな生徒に対して最大の効果が上がるような方法を選択し、実行していかなければならないのである。
- ◆私たち教師の仕事は、授業を核として子どもたちを変えていくことである。授業に隙ができていれば、必ずといっていいほど、子どもたちの行動に気になるところが出てくる。極端に言えば、「荒れ」が目立つようになってくる。
- ◆理科の授業だった。「ばねののびは、ばねを引く力とどのような関係があるのだろうか」という課題で、グループでの話し合い活動、そして実験を通して、本時の目標に迫ろうとしたものだった。教師が説明をした後、生徒たちに予想を立てさせた。ある女子生徒から「比例の関係」という模範的な回答が出された。もし、授業というものが模範的な回答を求めただけのものだったら、それで授業は終わりである。何の発見もなく、何も考えることはなく、心を動かされるような何の感動もなく、そこで終了なのである。しかし、授業者である教師の考えは違った。そこからもう一歩生徒たちに考えてもらいたいと考えていた。
- ◆ばねののびとばねを引く力とはどのような関係にあるのか課題を解決するために、予想を立てさせ、グループで話し合い、実験をした。当然、実験結果はグラフにして記録する。生徒たちは、実験したデーターを一つ一つグラフ上に点を打っていく。本当なら、点と点を結んで直線として表現させたい。しかし、教師はその場面では点だけでよしとした。生徒たちは、グループ内の4名程度でそれを見比べた。グループ内では一つの同じ実験をしているのだから、グラフも同じようになる。
- ◆しかし、教師はグループ内だけのものに終わらせず、自分のグラフをその机に残したまま、他のグループに移動することを指示した。生徒たちは、自分のグラフを残したまま、他のグループに移動する。生徒たちは、移動した先で自分たちの結果とは違う、他の生徒が作成したグラフを目にする。ほとんどの生徒は、同じような実験器具、同じ実験方法なのだから、当然結果もほぼ同じになると思っている。ところが違う。その違う結果を見た瞬間、生徒たちはびっくりする。ある生徒は思わず「えっ」と笑顔。ある生徒はじっと見ている。ある生徒は定規を当てている。ここにこそ、この授業の眼目がある。生徒たちの認識が次への段階へと誘われる瞬間なのであり、学びの楽しさを実感するきっかけとなっていく場面なのである。